



キムテツコ
金澤浩 編

『アナキズム、悲哀と憤怒の根源

—近代知識人の文学と農民主体文学の起源』(ソミョン出版、2015年)

김택호 『아나키즘, 비애와 분노의 뿌리 - 근대 지식인 문학과 농민주체문학의 기원』
(소명, 2015년)

ミョンジ
明知大学校国際韓国学研究所の研究教授である金澤浩は、2009年に『韓国近代アナキズム文学、見慣れない抵抗』(月印)という著書を出版したが、今回はアナキズム文学に関する2つ目の研究成果を世に送り出すこととなった。彼は今回の著書で、文学同人誌『廢墟』および『白潮』、そして農民組織たる朝鮮農民社の機関誌『朝鮮農民』および『農民』に収録された農民出身作家たちの文学作品に対するアナキズムの影響力を論じた。著者は、植民地期に朝鮮のアナキストたちが望んだのは、共同体をつくり、不当な政治的・経済的圧迫に抵抗することであったと述べる。これらの近代朝鮮アナキストたちの内面を描いた文学が1910年代後半に芽生え、1920～30年代に風靡したのだが、著者はそれらの文学を研究対象としたのである。

第1部「朝鮮の近代アナキズム形成の背景」は、朝鮮の近代アナキズム形成の背景を伝統的な儒学思想との関係において論じている。著者は実学と衛正斥邪思想、改新儒学、東学などとアナキズムの類似性を指摘し、アナキズムは人間が長きにわたって大切にしてきた普遍的価値観から決して遊離したものではないという点を示した。

もちろん、朝鮮のアナキズムに与えた近代思想の影響も無視することはできない。特に植民地朝鮮では幸徳秋水、大杉栄などによる日本のアナルコ・サンディカリズム(Anarcho-syndicalism、無政府組合主義)の影響が絶対的であったが、その影響下で1921年10月には結成された朝鮮最初のアナキズム組織たる黒濤会に著者は言及している。

第2部「新たな知識、新たな主体の出現」は、同人誌文学を牽引した若いエリート知識人と農民文学青年が出現した背景を論じている。著者は植民地下で無気力さに囚われた若いエリート知識人と農民たちが、文学空間を建設し、その内外で活動することになる条件を近代アナキズムとの関係性のなかで考察することで、新たな知識人と朝鮮の近代アナキズムの特殊性を同時に説明している。

1920年の知識人の開放性は、党派的な論理とは無関係にアナキズム、ボルシェビズム、象徴主義、ロマン主義、イマジズムなどを一つの潮流として受け入れるのだが、それは文学においても同様であった。象徴主義的な傾向の『廢墟』の同人たちが1920年4月に創立された朝鮮最初の労働組合たる朝鮮労働共済会に参加し、その機関誌『共済』に寄稿したのはその良い例であった。

同時に著者は、1920～30年代の農民運動においてすでに農民たち自身が自らの問題に主体的に対処する力を備えはじめていた点を強調している。朝鮮農民社の『朝鮮農民』とその後続誌『農民』は、機関誌である以上に、農民の教養・文化的メディアであった。同誌に登場する農民出身作家の存在は、

朝鮮の近代文学史の新たな場を開いた。

第3部「アナーキズムと象徴主義・自然主義・ロマン主義」は、1910年代後半から1920年代初め・中頃にかけて新たに誕生した文学同人誌と象徴主義、自然主義、ロマン主義などの文芸思潮、そして何よりもそのようなメディアを導き、鼓舞・激励した諸思想との関係について論じている。著者はその過程で、消長した『廃墟』や『白潮』をはじめとするメディアへの参加者たちが関心を向けた文芸思潮は、結局彼らが志向した理念の衣であったという点、そして彼らの理念形成にとってアナーキズムが深く関わっている点を明らかにした。

著者によると朝鮮労働共済会は、下部組織活動を農民が主導した一方、知識人は講演会の演士としての活動や機関誌『共済』への寄稿などに集中していたが、そのような知識人の活動は『廃墟』や『白潮』の同人にも当てはまった。それほどこの時期の作家たちはアナーキズムの影響下にあったのである。

第4部「農民主体文学の成立とアナーキズム」は、朝鮮農民社の機関誌『朝鮮農民』と『農民』に投稿した代表的な農民出身作家たちと彼らの作品について論じている。著者は「農民主体文学」と呼ぶ農民中心の文学作品が知識人文学とどれほど大きな違いがあるのか、またそのような特性とアナーキズムはどのように関連しているのかを説明している。

朝鮮農民社は天道教青年党によって中央組織が掌握されてはいたが、全体的には天道教を基盤とする組織にはならなかった。1931年4月、朝鮮農民社の傘下につくられた農民共生組合は、啓蒙団体とどまりそうだった朝鮮農民社に代案的で階級主義的な性格を付与するのだが、それにはアナーキズム運動と結合していた天道教徒が大きな役割を果たした。機関誌『朝鮮農民』もまた1925年12月の創刊号以来、次第にその内容は階級的な語調を強めていった。このような変化をリードしたのは林然と許文日であったが、二人は貧農または小作農の立場で自己の覚醒と階級意識の獲得のようなことを作品化した。

以上、金澤浩の著書を概観した。書名にある「悲哀」という表現は、近代の象徴主義・ロマン主義系の文人たちの文学同人誌における文学活動を、「憤怒」という表現は農民出身作家たちの朝鮮農民社機関誌における文学活動を象徴する。ただ、表面的にはこれら二つの傾向の文学活動には共通点がないように見える。しかし著者は、全く異なるものと思われてきた二つの傾向の文学を、アナーキズムという共通分母にもとづいて分析した。

これらの二つの傾向をアナーキズムと結びつけて説明するのは、根本的には植民地期の1920～30年代の朝鮮文学とは一体何だったのかという問いに答えるためであると著者は述べている。マルクス主義文学に比べて研究の少ないアナーキズム文学への、著者の絶え間ない探求は注目に値する。

〔翻訳 呉仁濟〕



ベクヨン ソ キムミョンイン
白永瑞・金明仁 編

『民族文学論から東アジア論まで——崔元植定年記念論叢』(創批, 2015年)

백영서·김명인 편 『민족문학론에서 동아시아론까지 - 최원식 정년기념논총』(창비, 2015년)

本書は、2015年に定年退職した^{イナ}仁荷大学校韓国語文学科の崔元植教授の定年記念論叢として編まれたものである。韓末の開港期（文学界の用語では「愛国啓蒙期」）文学から学問を開始した崔元植は、次第に「民族文学論」と「東アジア論」を取り上げるようになり、自身の論理を展開してきた。そして本書も、これらの2つの言説（discourse）の存在意義について再検討し、今再びその実践的議論に供するために企画されたのである。

質疑応答形式で行われた本書の総論「民族文学論から東アジア論へ」において崔元植は、20世紀後半の韓国知性史と共に歩んで来た彼の遍歴とその問題意識について語った。つづく「第1部 ポスト民族文学論」では、民族文学論の意義とその克服可能性が論じられている。^{ハジョンイル}河最日は、「第3世界民衆の視角と民族主義の内的克服」において、崔元植の属するいわゆる「創批」[出版社名。または同社発行の『創作と批評』誌の略称]グループの座長たる^{ベンナクチョン}白樂晴が第3世界論を通じて自らの民族文学論を分断体制論や近代克服論に発展させていく様子を紹介した。^{キムミョンファン}金明煥は「韓国文学と世界文学」において「世界文学」の観点から崔元植の研究姿勢にアプローチし、東アジア文学の脱近代および西欧中心〔主義〕的な近代理解の克服の可能性について分析し、彼の農民文学論のなかにある脱近代の問題意識を指摘した。^{チョジョンファン}曹貞煥は「韓国文学の近代性と脱近代性」において、植民地期の「親日文学」を含めた近現代文学史を総体的な国民文学史として定式化し、そのなかで脱近代の可能性を展望した。^{ファンジョンヨン}黄鍾淵は「東洋的崇高」において、植民地期の日朝知識人の「石窟庵」観にみられる「東洋的崇高」が当代日本のファシズム的アジア主義に染まっていることを指摘し、それを韓国発の東アジアに関するビジョンを新たに生み出す他山之石と捉えた。^{チョジョンファン}千政煥は「民族文学と民衆文学を再び考える」において、1970～80年代の文化の条件について分析し、いわゆるサブアルタン（subaltern、従属的社会集団）によるスローガン・ルポ・手記などの文学を通じて民衆文学論、民族文学論、そしてリアリズム文学論の文化史的文脈の再構成を試みた。金明仁は「民族文学論と崔元植」において、崔元植の仕事にはいわゆる「会通論」として知られる中庸的姿勢が貫かれていると指摘し、彼の民族文学論をめぐる理論的・実践的な模索について概説した。

「第2部 東アジア論」は、東アジア論の発展過程と現状・展望について扱っている。^{ユンヨイル}尹汝一は「東アジア言説の形成と移行」において、冷戦解体期である1990年代初めから参与政府〔^{ノムヒョン}盧武鉉政権〕期である2000年代中頃までの東アジア言説の展開過程を調査・分析し、その用法と地域的範囲の変化についての紹介を行った。^{イジョンファン}李政勲は「崔元植と韓国発の東アジア言説」において、崔元植が「小国主義」と「大国主義」のあいだの緊張を通じて東アジアの過去を映し出す一方、新たな理念型としての東アジアを再定義することを意図している点を紹介した。^{リョジョンピル}柳浚弼は「分断体制論と東アジア論」において、「創批グルー

プ」の「分断体制論」と「変革的中道主義」を検討し、朝鮮半島の分断体制の克服過程自体が東アジアの地域協力の場であり、東アジア共同体の出現に備える空間であると主張するこのグループの議論を紹介した。李日栄は「『東北亜—東アジア』へ進む道」において、韓国経済が国民経済はもちろん、無原則なグローバル経済の限界をも越えなければならない点を強調し、『東北亜—東アジア』という具体的な現実のなかで機能しうる代案的・平和的な経済の形成について模索している。李旭淵は「東アジア共同体の文化言説に対する批判的考察」において、韓国で提起された東アジア共同体建設のための言説における、主に文化的な問題について分析した。彼は、東アジア共同体が多様な空間のなかでそれぞれの文化が混じり合う空間にならなければならないという点を強調した。林春城は「東アジア論と大衆文化の超国的横断」において、香港の大衆文化、特に金庸の武侠小説である『英雄門』シリーズの韓国における受容過程を分析し、東アジアの大衆文化の超国家的生産と流通について文化的横断と疎通という観点から着目した。中国社会科学院の張志強は「『巨大分断』の克服と理想的東アジアの可能性」において、「韓中人文の紐帯強化」が東アジアの未来に与える意味について考察した。彼は白樂晴が提起した東アジアの「巨大分断」を議論の基礎に据え、「中道主義」という知恵によって東アジア内部の分裂を克服し、人文的紐帯を強化することを提案した。最後に白永瑞は「核心現場において再考する『新たな普遍』」において、東アジア論が思想的・実践的な資源となるための理論的更新の一環として、欧米中心の普遍主義という言説の解体と「新たな普遍」の拡大を提起した。

韓国文化の研究者であり批評家として定年を迎えた崔元植は、今もなお民族文学論と東アジア論を中心に絶えず新しい問題意識を生み出す「現役」である。そのような崔元植教授の定年を記念する本書は、私たちの時代になおも自生性と具体性の面において注目される理論の未来を展望している。執筆陣の見解は統一的ではなく、時には相互に衝突したりもする。しかし、だからこそ、多様な可能性に向けて開かれているのが本書である。

〔翻訳 呉仁濟〕